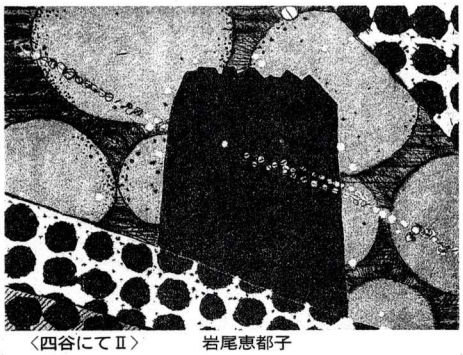
# 朝日 俳壇 歌壇



〈四谷にてⅡ〉　岩尾恵都子

## 高山れおな選

波平は不老不死なり赤まんま　（橿原市）上田　義明

猪を無視してゴルフスタートす　（小山市）小林　申忠

山国の山を埋めて霧きたる　（東京都足立区）望月　清彦

木犀や朝日のあたる地鎮祭　（広島市）金田　美羽

行列のホルモン焼き屋鳶の秋　（戸田市）蜂巣　厚子

あつぱれの句作浮かばず冬に入る　（いわき市）広木　桂子

脱皮する人しない人衣被　（川崎市）神村　謙二

鯛焼を食み鯛焼を売るバイト　（市川市）をがはまなぶ

秋晴の底の底まで黒部ダム　（長野市）縣　展子

逝く秋や愚行の如く投句せり　（我孫子市）藤崎　幸恵

【評】上田さん。サザエやカツオでは、この不気味な効果は出まい。小林さん。危険でももう慣れっこ。慣れっこであること自体におかしみが。望月さん。「埋めて」が力強い。藤原範永に〈たづねつる宿は霞にうづもれて谷の鶯一声ぞする〉。

## 小林貴子選

何してもおもしろさうな秋の空　（兵庫県多可町）松下　孝裕

衣被これはなんだな素描だな　（長崎市）里中　和子

不条理は世になきやうな良夜かな　（石川県能登町）瀧上　裕幸

梅もみぢ日色ともゑの長合詞　（川崎市）丸田　征男

身に入むや初代ギターの傷数多　（千葉市）甲本　照夫

叩くなら世の中起こせ鉦叩　（藤沢市）安井　海

身に入むや喪服自分で浄めかけ　（市川市）をがはまなぶ

風の声少し大人び冬に入る　（印西市）鈴木とみ子

恋人が投げる木の実はデンジャラス　（長崎市）村山信一郎

肌を出す海外客の冷まじき　（神奈川県箱根町）渡邉英一郎

【評】一句目、一番面白いことを実行したい。俳句の吟行かな。二句目、皮つきの里芋煮を見て何かを想起する。「ああ、絵画の素描に見える」と。三句目、作者が能登在住ということで、深く心に沈む句。四句目、日色ともゑさんがお元気。

## 長谷川櫂選

別姓の二人並んで菊枕　（厚木市）奈良　握

鵯や一花に深く拘はらず　（朝倉市）深町　明

さびしさは光のなかの露の玉　（長崎市）下道　信雄

カンガルーのポッケに入りたい夜寒　（日光市）土屋　恵子

闘牛のふぐりの踊る野菊かな　（津市）中山　道治

初霜へ抱いて連れ出す仔犬かな　（大阪市）上西左大信

雑炊や昭和の卓に味の素　（越谷市）安居院半樹

ほどほどに衣食の足りて夜長月　（鹿児島市）林　英樹

「死神です」「燗つけますか」良夜です　（八幡市）小笠原　信

俳壇へメール一瞬鳥渡る　（市川市）高野　厚夫

【評】一席。本人たちは喜び、誰も迷惑しない。菊枕は長寿の枕。二席。花から花へ、せわしなく移る。これも花の愛し方。三席。露の玉というさびしさ。明るい光の中ゆえに。九句目。「死神」という酒があるとか。十句目。メール投稿盛況。

## 大串章選

露の世をみな懸命に生きてをり　（玉野市）北村　和枝

迷ふたび母の遺言冬ぬくし　（仙台市）八島あけみ

稲雀まで数の減り過疎の里　（加東市）藤原　明

酒好きに古酒も新酒もなかりけり　（神戸市）岸下　庄二

わが街の太古は海よ銀河濃し　（札幌市）伊藤　哲

風を追ひ風に追はれて赤蜻蛉　（京都市）室　達朗

葬送の一回りする刈田かな　（大垣市）大井　公夫

夕紅葉我が身一つの山家かな　（横浜市）橋本　直樹

深秋の古書肆に眠る資本論　（大阪市）上西左大信

別々の部屋それぞれに夜長かな　（羽曳野市）菊川　善博

【評】第1句。露のようにはかないこの世、人は皆一所懸命生きている。自分もそのひとり。第2句。岐路に立つたび亡き母の言葉を思い出す。母には今なお学ぶことが多い。第3句。「稲雀まで」が寂しい。看過できない農業地帯の過疎化。

## 短歌時評　生成AIと詠む

小島　なお

十一月六日、東京都内の書店でイベント「なぜAIとヒトは歌を詠むのか」が行われた。登壇者は朝日新聞社メディア研究開発センターの浦川通氏、歌人でありAIエンジニアの睦月都氏、「AI一茶くん」の開発に携わる俳人の大塚凱氏。

生成AIが作歌をすることへの危機感や善悪に留まっていた議論をアップデートしたいという趣旨のもと、いくつかの研究事例が紹介された。たとえば東北大学で開発されているのは短歌投稿サイト上の「いいね」の数をスコアとして作品精度をあげてゆく報酬モデル。ヒトが結社や歌会を通じて、善し悪しを学ぶのと同じように評価軸を持つことで体系的な学習が再現可能だという。また統計数理研究所の持橋大地氏らが共同研究しているのは、ヒトの短歌に対する評価の傾向を統計的に分析するというもの。あるデータでは「作品の完成度：良い／悪い」「好き／嫌い」の評価がともに高い作品として、栗木京子の代表歌「観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日我には一生」などが選出されている。

研究を通じて「いい歌とは何か」というAIに与えた問いが、そのまま人間に返ってくるという浦川氏の言葉が心に残った。近いうちに私たちの想像を超えた創造的なAIが誕生するだろう。けれど、ヒトの教えるデータを元にする以上、短歌の命題は謎のままになるのではないか。千三百年もの歴史を短歌が生き延びてきたのは誰も「いい短歌とは何か」への返答ができなかったからだろう。これからはAIとバディを組んで謎に立ち向かうことになるのだ。（歌人）

## 風信

**月野ぽぽな句集「人のかたち」**　現代俳句新人賞、角川俳句賞俳人の第1句集。「途中下車してしばらくは霧でいる」「もうすぐで雪のはじまりそうな肌」（左右社・1980円）

**岩田奎著「田中裕明の百句」**　「はじめに」で裕明を「令和俳句の通奏低音、共通のコードといえる存在」と解説。「みづうみのみなとのなつのみじかけれ」（ふらんす堂・1650円）

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます（週に3作品まで）。QRコードから